

中学校体育におけるエキスパート・ティーチャーの 職能構造に関する定性的研究 (1)

A Qualitative Study on the Components of Professional Competencies
Possessed by 'Expert Teachers' of Physical Education
in Junior High Schools (1)

兄 井 彰 本 多 壮太郎

Akira ANII
保健体育講座

Sotaro HONDA
保健体育講座

(平成24年10月1日受理)

Abstract

This study attempted to interpret what kinds of thoughts junior high school PE teachers called 'expert teachers' have about the way of PE lessons. Eight teachers were subjected to this study and they took part in semi-structured interviews which took one hour to one and half hours. They made comments on their thoughts about PE such as their teaching philosophies, how they try to develop students' skills and motivation, how they deal with students who are not good at sports, what sorts of competences they think are necessary as PE teachers.

Their comments were divided into three categories; 1) their views on ideal PE lessons, 2) their PE teaching practices and 3) what PE teachers' duties are. This study reports their thoughts about PE lessons in 1).

A category of their views in ideal PE lessons was also divided into two sub-categories; 1) what they would like to achieve through their lessons and 2) how they recognise PE lessons.

Key words: Expert Teachers, Qualitative Study, Physical Education

I. 緒言

体育教師に求められる力については、資質や能力、専門的力量あるいは職能といった用語のもとで検討されている。さらに、求められる体育教師像を明らかにしようとする体育教師論(中井, 1997)においても検討されている。本研究では、体育教師に求められる力を、これらの用語の辞書(広辞苑第六版)的意味合いから、生まれつきの性質、才能を意味する「資質」や単なる物事をなし得る力とされる「能力」、人の能力の大きさの

度合である「力量」ではなく、職業・職務上の能力である「職能」という用語で表現し、検討することとする。

これまで体育教師の職能については、数多くの提案や研究がなされている。例えば、嘉戸(1991)は、保健体育教師に望まれる一般的資質、能力として、①普通以上の健康と体力に恵まれ、いつも活力にあふれていること、②生徒の心身の発達について基礎的な知識はもとより、保健や体育の発達の、あるいは社会的な必要性、価値についてしっかりした知識、考えを持っていること、③保健や

体育の年間計画や単元計画の立案、及び実際の学習指導の指導法などに関する専門的な理論や方法を持っていること、④運動の技術に関する専門的知識並びに技術指導に関する専門的な知識と実技の能力を身につけていること、⑤保健や体育の理論、指導法の知識、能力を高めるための研究、研修に関心を持ち、実践していける能力があること、⑥学校内、あるいは、学校外の体育的活動や行事の企画、運営、指導並びに施設・用具の管理などに関する知識を備えていること、⑦体育指導における安全に関する知識や、事故が起きた時に適切に処理できる能力を身につけていることの7項目を示している。また、武隈(1992)は、体育に関する職能の内容について、情熱や人間性といった人格的側面と確かな教育・体育観や理念を基底として、児童・生徒を理解する能力、体育の指導能力、体育の経営能力、学校や教育・体育をとりまく諸条件の認識能力から構成されることを示している。これらの文献では、体育教師の職能について、教師はこうあるべきとする規範論的な内容が記述されているが、他の文献や調査による根拠資料が示されていない。

また、木原ら(2005)は、戦後の日本において保健体育教師に求められてきた専門的力量に関する研究について検討し、教師や研究者としての経験や諸外国の文献資料により、教師はこうあるべきとする規範を検討した規範的研究と質問紙調査や授業観察という資料により、教師の力量を検討した実証的研究があることを明らかにしている。さらに、彼らは、保健体育教師の専門的力量について、様々な資料を基に、体育授業における①知識、②パフォーマンス、③態度、④部活動、⑤生徒指導、⑥パーソナリティの6つのカテゴリーに分類して、整理している。

最近では、中学生に質問紙調査を実施し、体育授業において教師に望まれる行動を明らかにしている実証的研究(村瀬・阿部;2010)も行われている。この研究によると、教師に望む行動として、充実した学習環境、学習者と同等の介入、批判、励ましを抽出している。

さらに、体育教師像についての研究(中井ら、1996)では、大学生が考える中学・高等学校時代の体育教師のイメージについて、慕われる人、専門的な能力、熱心な指導など11因子を抽出している。

以上のように、体育教師に必要な職能については、さまざまな提案や研究が行われており、先に示した通り、教師はこうあるべきとする規範的研

究と、授業を受ける側である子どもや大学生に質問紙調査を行い検討した実証的研究が数多くみられる。しかし、体育を指導する教師の立場から職能を検討した研究はほとんど行われていない。

特に、体育授業において優れた実践を行っているエキスパート・ティーチャーと呼ばれる体育教師が、体育をどのように考え、指導し、職能をどのように捉え、それをどのように形成しているかについて検討することは、職能構造について明確にできるだけでなく、体育教師の職能成長とキャリア形成のための具体的な指針を示すことができると考えられる。

そこで本研究では、体育教師の職能について明らかにする手始めとして、エキスパート・ティーチャーと呼ばれる中学校保体育教師に対して、インタビュー調査を行い、優れた体育教師が体育授業のあり方についてどのような考えを構築しているのかを理解することを目的とする。

II. 方法

1. エキスパート・ティーチャーの選定

対象者を選定するにあたり以下のような基準を設けた。

- (1) 20年以上の教職歴を有している。
- (2) 大学の附属中学校教諭や体育研究所長期派遣研修員、主幹教諭、指導主事などの経験を有している。
- (3) 体育に関する著書、研究論文、紀要、報告書などの執筆に携わった経験を有している。
- (4) 優れた体育教師であるとの客観的評価を得ている。

上記の基準を満たす対象者を選定するにあたり、F県体育研究所の協力より、同県内で勤務し、体育の授業・研究実績や研修歴、教職経験などが豊富な教員について情報提供及び紹介を受けた。それらの情報をもとに、研究者らで最終的な選定を行い、計8名をエキスパート・ティーチャーとして本研究の対象とすることとした。対象者の平均年齢は47.88(±1.96)才、平均指導歴は25.29(±2.43)年、専門実技の内訳は陸上競技が5名、サッカー3名であった。

2. データ収集

対象者の職能を調査するにあたり、質問紙調査による対象者の基本的情報とインタビュー調査による専門的情報を収集した。

1) 質問紙調査

対象者へは、研究の趣旨説明と協力依頼の文書とともに、対象者の年齢、専門実技、教職歴、これまで行った研究授業や公開授業のテーマ、執筆した著書、論文、紀要、報告書などの基本的情報について回答を求める質問紙を郵送した。また、その際、インタビューにおいて「体育の捉え方・授業哲学について」「運動の技能の高め方」「運動意欲の高め方」「運動が苦手な学習者への対応」「体育教師の職能」といった専門的情報を質問する旨の文書も同封した。

2) インタビュー調査

インタビュー調査においては半構造的インタビューを採用した。半構造的インタビューでは、主な質問項目や質問の流れは予め計画・準備されるが、質問者は実際のインタビューにおいてそれに固執することはなく、会話の流れを重視する。Patton (1990) や Robson (2002) は、このような半構造的インタビューの利点は、研究者が対象者の見方・考え方などについて深い理解を得ることが可能であるということ、対象者がより柔軟に自分たちの考えを説明することができることにありと説明している。また、このインタビュー法では、対象者の質問に対する理解を助けたり、誤解が生じている場合は、それを修正したりでき、質問者に複雑な質問に対する答えを得ることが可能となる。このような理由により、対象者の職能に関する専門的情報を深層的、現実的、包括的に収集するにあたっては、半構造的インタビューが最も適した方法であると判断した。

本研究の対象者には、それぞれ約1時間から1時間半のインタビューに参加してもらい、事前の質問紙から得られた基本的情報に関する確認や専門的情報に関することについて質問し、対象者に自分たちの考えや実践方法などについて語ってもらった。インタビューの場所は対象者の職場や筆者らの研究室であり、インタビュー内容は対象者の承諾のもとICレコーダーにより録音した。これらのインタビューは平成24年10月から12月の間に行われた。

3. データ分析

インタビューで得られたデータについては、Côtéら (Côté *et al.*, 1993: Côté, Salmela & Russel, 1995) 及び北村ら (北村ほか, 2007: 永山ほか, 2007: 齋藤ほか, 2007) を参考に「トランスクリプション」「ユニット化」「タグ化」「サブカテゴリー化」「カテゴリー化」による定性的データの段階的分析法により処理された。

1) トランスクリプション

録音された全てのインタビューの内容は、対象者それぞれの名前を付けWordドキュメント上にテキストとして記述・保存された。記述化された全てのデータを統合すると、1ページ40行×40行文字のレイアウトで全74ページ、97,452語となった。

2) ユニット化・タグ化

全テキストは、1つの考えや実践例、エピソード、情報などを含む「ユニット」ごとに分類された (Côté, *et al.*, 1993; Tesch, 1990)。266のユニットそれぞれには内容に関する名称が付ける「タグ化」が行われ、同じ名称のタグは同一グループとして27のタグにまとめられた。

3) サブカテゴリー化

グループ化されたタグは、タグ同士の比較を重ねることにより再び分類化され、内容が同種であると判断されたタグは「サブカテゴリー」として再グループ化された。この過程で27のタグは8のサブカテゴリーにまとめられた。

4) カテゴリー化

サブカテゴリーについてさらに広範へのグループ化を行う作業を行った。サブカテゴリー化よりもより抽象的なレベルでの分析作業が行われ、研究者らの間でもはや新しいカテゴリーは創出されないという判断に至るまでこの作業を継続した。その結果、表1に示す通り8つのサブカテゴリーは「体育の授業観」「体育授業の実践」「体育教師の職務」といった3つのカテゴリーにまとめられた。本稿ではこの内、対象者の「体育の授業観」に関する分析結果及び考察について報告する。

4. 方法論及びデータ解釈に関する信憑性

本研究のような質的研究における妥当性と信頼性は、量的研究のそれらとは異なる基準が求められる。量的研究における妥当性は、記述された仮説、採用された方法、分析方法に関する一貫性の程度について (内的妥当性) と、現在行っている研究と同領域で既に明らかにされている研究との相互関係の程度についてである (外的妥当性) (Denzin & Lincoln, 1998)。量的研究における信頼性は、同じ方法が採用された場合、同様の研究結果が得られるかといった採用された方法の正確性及び明瞭性によるものである (Bryne, 2002)。一方、質的研究においては、研究対象者が調査過程において表現した現実や考え方と研究者が解釈したものがどれだけ一致するか、研究プロセスの

表1. 体育教師の職能に関するカテゴリー

体育の授業観に関するサブカテゴリー(S)とタグ(T)
S1. 授業目標 T1. 体育授業で目指すもの T2. 体育授業で心掛けていること
S2. 体育の捉え方 T1. 運動特性の捉え方 T2. 体育と生涯スポーツの関係
体育授業の実践に関するサブカテゴリー(S)とタグ(T)
S1. 運動技能の習得や向上 T1. 運動特性への触れさせ方 T2. 運動技能の高めるための考え方 T3. 運動技能を高めるための手立て
S2. 運動意欲と運動の学び方 T1. 運動意欲の高め方 T2. 運動の学び方の高め方
S3. 学習者との関わり T1. 指導性と主体性 T2. フィードバックの与え方 T3. 学習者の評価 T4. 運動が苦手な学習者への対応 T5. 運動が得意な学習者への対応
S4. 体育授業における課題 T1. 体育授業の現実 T2. 学習者の体力向上 T3. 苦手な種目
体育教師の職務に関するサブカテゴリー(S)とタグ(T)
S1. 体育教師の職能 T1. 体育教師として果たすべき責任 T2. 体育教師に求められる力 T3. 体育教師を目指す者へ
S2. 職能形成の下地 T1. 体育教師としての喜び・やりがい T2. 反省点 T3. 経験した困難点 T4. 指導観・指導方法の背景 T5. 指導力の高め方 T6. 授業研究・教材研究について T7. 授業外での指導・活動

十分な記述がされているか、などの要素を満たした「信憑性」が保証されることが求められる (Lincoln & Guba, 1985; Miles & Huberman, 1994; 北村ら, 2007)。

これらの要素に関する大部分は、研究手続きの一貫性とともに、後述の分析結果と考察の記述に対する読み手の判断に委ねられることになるが、ここでは北村ら (2007) を参考に、信憑性の保証の一環としてインタビューにおける手続きや配慮とともに、分析及び考察の過程について幾つかの点を記す。

第1に、前述したように、対象者に関する基本的情報を質問紙への回答を通して把握し、対象者にも研究の趣旨及びインタビューでの主な質問内容について予め把握してもらうようにした。これにより、インタビューのスムーズな実施を図るとともに、専門的情報に関する内容を包括的且つ深層的に得られる確実性を考慮した。第2に、質問者の質問に対して対象者が自分たちの考えを語る際には、正しい、間違った回答というものは一切ないことを予め伝え、質問に際しては対象者の発言を誘導したり、批判したりすることのないように配慮した。これにより、質問者の影響といったバイアスを一切省き、発言内容に関する信憑性を確保するようにした。第3に、半構造的インタビューの利点を活かし、インタビューの際は、対象者が質問者の質問の意味を確実に理解しているかどうか、インタビューの最中に何度も確認を行った。また、インタビューの最後には、話しそびれたこと、途中で思い出して今付け加えたいこと、修正したいこと、もう一度はっきりとさせておきたいこと、など必ず質問するようにした。これにより発言した内容の確実性と信憑性が得られるようにした。第4に、これも前述のように、インタビューデータの分析にあたっては、データを研究者間で共有し、数回にわたるディスカッションを通して分析を行い、内容に関する解釈及び分析結果の一致が得られるまで作業を繰り返すことで確実性を確保するようにした。第5に、分析結果及び考察の記述については、対象者が実際に語った言葉をできるだけそのまま引用するとともに、「トライアングレーション」に基づき (Burns, 1994; Silverman, 1993)、出所が異なるデータや異なる方法によって収集され分析、考察された先行研究と比較しながら進めるようにした。これにより、発言内容と分析結果及び考察の関係に関する確実性と信憑性の確保を図った。

5. 倫理上の配慮

本研究は、Bodgan & Biklen (1992) が指摘する研究倫理の原則を参考に進められた。対象者には質問紙とともに研究趣旨の説明書が送付され、研究への理解及び協力についての同意書を提出してもらった。データの分析結果の公表にあたっては、対象者や対象者が語った人物を傷つけるような情報は一切公表しないこと、発見された真実のみを記述することが各インタビュー前に約束された。

Ⅲ. 結果

「体育の授業観」のカテゴリーは、「授業目標」「体育の捉え方」から成るサブカテゴリーにより構成された。以下では、各カテゴリーの分析結果をサブカテゴリーごとに説明する。

「体育の授業観」のサブカテゴリーである「授業目標」は、「体育授業で目指す」と「体育授業で心掛けていること」の2つのタグで構成された。もう一つのサブカテゴリーである「体育の捉え方」は、「運動特性の捉え方」と「体育と生涯スポーツの関係」の2つのタグで構成された。また、インタビューデータから抽出された総ユニット数 266 のうち、「体育授業像」に関するユニットは 44 ユニット (16.54%) であった。

1. 授業目標

「授業目標」の「体育授業で目指すもの」は、授業を通して学習者に習得させたいことと対象者自身が成し遂げたいことの2つの内容について語られた。前者について、対象者の一人は、技能の習得及び向上の観点から、次のように述べている。

「... 体育というのはいろんな教科がある中でも非常子どもたちが意欲的に取り組むことができる教科で、学習教科で意欲も高いものです。その中で子どもたちの今の技能のレベルに合わせて『できる』を作りだしていく。できる子どもには『よりうまくできる。』こういったものをカリキュラムの中に位置づけて行っておりました。」(対象者 D)

体育授業において、技能の習得や向上は、学習目標及び内容であり、評価の観点でもある。しかし、技能レベルは学習者によって異なり、同じ技能に関する目標設定することはできない。このことを考慮して、この対象者は、「子どもたちの今の技能のレベルに合わせて『できる』を作りだしていく」「できる子どもには『よりうまくできる』」という発言でわかるように、学習者一人ひとりに

見合った技能の習得や向上を目指すという考えが語られた。同様の考えは、他の対象者からも語られた。

これに加え、以下の対象者は、単元終了時の学習者の技能をどの程度まで高めるかについて、具体的な考えを、次のように述べている。

「... 私の授業は一貫して、その単元に入ったらずぐに AA・A・B・C とこの4段階の評価をすぐにして、そしてその単元が終わるまでに絶対にみんな目標としては最低限でも B 以上、できれば A 以上にみんななるんだというところに重きを置きながら。」(対象者 B)

この対象者は、単元開始時に学習者の技能を評価した上で、その学習者に見合った目標を設定するが、単元終了時の最終的な学習者全員の技能目標は、より高いレベルを設定している。「絶対にみんな目標として最低限 B 以上」という目標を設定しているこの対象者は、学習者の技能をより高める教師として、他の教師や教育者から客観的評価を受けている。上記のように語っていることから、この対象者の力量と自信の高さが窺える。

以上、体育授業において、技能の習得や向上を目標にしている例を紹介したが、これらの対象者は、授業において、技能の習得や向上だけを目標としている訳ではない。例えば、対象者 B は、学習者全員が B 以上を達成することが最終目標ではなく、技能の習得や向上を通して、他の重要な目標であることを、次のように述べている。

「運動技能を伸ばすことには変わらないんですけど、運動技能を伸ばすということが最終目的ではない授業なんですね... 運動技能が伸びたときに子どもたちは達成感を味わうわけで、... その運動技能を伸ばした人間が自分という人間はやればできるところに感動して、そう伸びたことに対して、周りに対して、仲間に対して、先生に対して、いろんなものに対して感謝。感謝の最大の最上級は「誇り」。「〇〇中学校で体育を3年間学べたことを誇りに思います。」「この仲間と一緒に最後までやり抜いたことを誇りに思います。」「〇〇中学校で□□先生に教えてもらったことが本当に幸せでした。」と(卒業前の感想文に)書けるように体育の授業を仕組んでいかなくちゃいけないんじゃないかなと思ってます。(対象者 B)

このように、この対象者は、技能が高まった達成感を通して、学習者に感謝する気持ちを引き出そうとしている。さらに、仲間や教師と一緒に学習をすることに「誇り」を感じさせたいとも語っている。言い換えると、運動に対する有能感を通

して、社会的な態度や行動を引き出し、自尊心の向上を目指していると言える。

次に、体育授業を通して学習者に習得させたいもう一つの内容は、生涯にわたって運動やスポーツを楽しむ力に関するものであった。対象者の一人は、次のように述べている。

「生涯にわたって楽しんでいく、そういうふうな力、力というか資質を体育の授業でつけさせていきたい。で、生涯に亘って太くスポーツに親しむ、運動に親しむってことはどういうことかと考えたときに勿論運動、スポーツですから『やる』ってことです。『実践する』『自分がやる』。それと大人になっていけば、スポーツや運動を支えていく、或いはスポーツや運動に興味を持って見る。ま、そういうふうなスポーツに本当に親しく人生を通して親しんでいくようなそういう資質を子どもたちにつけさせたい。」(対象者C)

上記の対象者を含め、複数の対象者は、学習者自身が、生涯にわたって運動やスポーツに親しみ、生活を豊かにしていくためには、授業において、運動やスポーツの楽しみ方を学び、運動に親しむ資質や能力を育成しなくてはならないと語っている。この考え方は、現行の学習指導要領に準拠しており、対象者が運動やスポーツの本質的価値である楽しさを重視した授業を行っていると推察できる。

次に、体育授業を通して対象者自身が成し遂げたいことについての対象者の考えを紹介する。その一つは、体育や体育教師の存在価値に関するものと、もう一つは、対象者自身の授業実践の方法に関するものであった。前者について、ある対象者は、次のように述べている。

「...、体育っていうものの価値を高めるっていうことですかね。文化ってこうよく言われますけど、今度の担任体育の先生?という感覚ですね。特に〇〇校で感じたんですけど、5教科の先生は大丈夫で技能教科だったらちょっと残念みたいな。そういうのじゃなくて体育っていうのはこんだけ大切だし勉強もしてますよっていうところですかね。」(対象者E)

この対象者は、授業を通して目指すものについて、学習者の運動技能を高めることと運動好きにさせることと語っている。これらに加えて、この対象者は、普段から学習者の認識が、体育の価値や意義及び体育教師に対して低いと感じており、授業を通して認識を高めたいと考えている。この対象者は、他の体育教師の指導や体育教師を目指す学生への指導に長年携わっており、このような使命感にも似た考えを持っているようである。

もう一つの考えは、対象者自身の授業実践の方法に関するもので、授業を通して得られた成果の適用性に関する内容であった。

「基本的にですね、教具、変わった教具は一切使わないです。...、『何か変わったもの使ってるんですか』と聞かれるんですけども使ってないです。で、特殊な教具があってそしてその下で運動が例えばできれば、それは研究したときに僕は一般化に繋がらないんじゃないかと思ってのりです。...、研究っていうのは自分なりの考えでいけば、その成果が一般化して多くの子どもたちが自分にもやればできる、ということ達成感や運動の楽しさなんかを味わわせることができるために研究するんであって、その時に特殊な教具であったり、特殊な環境であったり、恵まれすぎる環境を作ってしまった、そしてその成果が上がった場合に、全国を調べていくとそうではないところの方が多く中で、むしろ恵まれてないような中で子どもの意欲を尊重していきながら、意欲を引き出していきながら子どもと一緒にやっていく中で伸ばしていくというような方向でちょっと考えています。」(対象者B)

このように、他の教師から上記のような質問をよく受けること自体、この対象者が高い評価を受けていることを示すものである。さらに、この対象者は、特別な教具を一切使わずに成果を挙げることがを信条としている。この考えの背景には、自分の授業における成果は、自分だけに限定された特別なものではなく、他の教師にも役に立つものでなければならないとの思いがある。ここでも、前述の対象者Eと同じく、自分だけの成果であってはならないという考えが語られている。

続いて、対象者が毎回の授業の中で気をつけていること、実践しようとしていることで構成される「体育授業で心掛けていること」に関する対象者の考えを紹介する。ここでは学習者一人ひとりに着目することについての考えが数多く語られた。前者について、対象者の一人は、次のように述べている。

「子どもたちの運動技能は千差万別、できる子どもできない子もいるんですけど、やはり毎日子どもたちが何かに期待して学校に来ているので、1回の学習の中で1つでもできること、これがですね味わえるように日々の授業を組んでいく必要があるんじゃないかなと思います。」(対象者D)

また、別の対象者は、学習者への称賛といった観点から、次のように述べている。

「...、私が褒めているときは本当に子どもたちは嬉しそうにします。で、本当にだからそのためには

アンテナを最大限に張ったような状態にして、子どもたちが前の授業のレベルと今日の授業で伸びた瞬間、前の時間のことを全部頭に入れておかないと、その子どもができるようになった瞬間っていうのを見過ごすこともあるし、見逃してしまっただけな気持ちなんです。」

「質問者：40人いる子どもたちを。アンテナ張ってますね。」

「はい、見えますね。そういうふうにしようと心掛けています。」(対象者B)

上記と同じような考えについて、他の対象者は、毎回の授業の中で、学習者に対して、「何か一つ掴んで帰らせる」「(チームスポーツにおいて)それぞれの居場所を作る、活躍するポイントを作る」「(球技において)個々の学習者が少しでも多くボールに触れる機会を確保する」と語っている。さらに、学習者一人ひとりに着目することについて考えを述べた対象者の多くは、運動の苦手な学習者や運動が好きでない学習者に対して、どのようなことを心掛けていくかについての考えを続けて語る傾向にあった。

2. 体育の捉え方

「体育の授業観」のもう一つのサブカテゴリーである「体育の捉え方」を構成する「運動特性の捉え方」については、生涯スポーツの立場から人々が運動やスポーツをどのように楽しんでいるかといった観点と他の運動やスポーツには見られないその運動やスポーツ固有の競技特性とは何かといった観点からの捉え方の2つが語られた。

例えば、水泳であれば、短い距離を速く泳ぐことも楽しいが、学校体育以外では、長い距離をゆっくりと泳ぐことを楽しむ場合が多い。このように学習者が、将来、その運動やスポーツをどのように楽しむのかといった観点から運動特性を捉えることは、生涯にわたる運動やスポーツの実践にとって重要だという考えである。

また、他の運動やスポーツに見られない固有の楽しさを味わわせる重要性についても語られた。例えば、柔道や剣道といった対人競技では、形や個人技能の習得よりも、対峙する相手とのやりとりといった攻防に面白さがある。また、バレーボールなどの集団種目では、三段攻撃のような集団技能に面白さがあり、この面白さこそ運動やスポーツの特性であり、少しでもこの特性を味わわせるようにしていきたいという考えである。この考えを持つ対象者からは、実際の指導現場では、その運動やスポーツの醍醐味ともいえる固有の競技特

性を味わわせることは決して容易ではなく、様々な配慮や工夫が必要であることも語られた。さらに、他にも重視されるべき特性や学習内容があり、学習者によっては高い目標になる場合もあることも承知の上で、その運動やスポーツの醍醐味ともいえる固有の競技特性に触れさせたいとも考えているようである。

「体育と生涯スポーツの関係」については、これまでの「体育の授業観」のカテゴリー内において、その内容が、ほとんどが語られている。前述の運動やスポーツの醍醐味ともいえる固有の競技特性とは何かといった観点から「運動特性の捉え方」について語った対象者は、次のように述べている。

「...、剣道の試合をテレビで見て、そのすごさってというのは中学校の時にそれをやってみてその難しさとかそんときの気持ちの具合とかをわかってると、また見方が全然違うと思うんですよ。剣道もそうですし、例えばサッカーの試合でも昔はサッカーは点数が入らんけん見よっても楽しくないという意見が多かったけれど、あれをある程度授業で経験していると、あのパスのすごさ、あの展開のすごさがわかるとサッカーのゲームを見る楽しさが全然変わってくると思うんですよ。そういった意味から将来的にスポーツに親しむという意味からもやっぱり特性に触れとくっていうととても大事だなと私は思いますね。」(対象者C)

このように、授業でその運動やスポーツの特性に触れさせることで、今まで実感できなかったプレーのすごさや魅力を発見でき、運動やスポーツを「みる」と「わかる」といった関わり方により親しむことができるという考えである。

授業を男女共習で行っている対象者は、人々がどのように関わり合いながら運動やスポーツ楽しむかについて、次のように述べている。

「僕の中では男女差は個人差とってるので。そう思うようにいつの日にかなってですね。男女別習にしてる方は、指導上の能率からしてると思うんですよ。子どもの特性よりも。まあ競技スポーツは男女別じゃないかって言われればそれまでですけど、競技スポーツを目指して体育をしてるわけじゃないので、体育を通してどう楽しめるかとか生活を豊かにするかなので、やっぱり男女一緒にやるってのは大事で、より幅広い個人差にどう対応できるかで、その意識を変えるのが体育じゃないと変えられないみたいなふうには思ってるんですね。」(対象者H)

この対象者は、「体育授業で目指すもの」について、授業を通して、学習者に生涯にわたって運動やスポーツを楽しむ力を養わせたいと語ってい

る。それに加え、幅広い個人差に対応して運動やスポーツを楽しむことを学ぶことにより、より豊かに運動やスポーツと関われるとする考えが語られた。

さらに、運動やスポーツを「する」という関わり方からも複数の対象者からの考えが示された。以下では、運動やスポーツを積極的に「する」という態度を育成するためには、中学校期における体育授業がどのように位置づけられ、何が学ばれ、どのような資質や能力を育成するのかといったことについての考えを紹介する。

「僕たちがやってるのは基礎作りですから。生涯スポーツの基礎作り。技能ができる、そのための思考考え方ができる、学び方ができる、そのための知識がある、そうやって意欲があがっていく。やってみようかな、もっとやってみようかなっていうのがずーっとつながっていくっていうのが僕は最終的には生涯スポーツにつながっていくよか時間の使い方とって僕は思うんですね。」(対象者 G)

この対象者は、運動やスポーツに積極的に参加する態度を育成するためには、単に運動やスポーツが上手くなるだけでなく、運動やスポーツに関する知識や思考を獲得する中で技能が習得し向上させることで、意欲が高まると考えている。また、このような経験が、運動やスポーツの実践を継続させるためには必要だとも考えている。この対象者が使った「基礎作り」という言葉は、自ら考えながら運動やスポーツが「できる」ようになり、そのための知識が身につくような基礎的な学習を行わせることを意味していよう。

IV. 考察

「授業目標」のサブカテゴリーでは、対象者らが授業を通して目指すものとして、運動経験や技能レベルが様々な異なる学習者に対応して「できる」「よりうまくできる」ようにするという考えや生涯にわたって運動やスポーツを楽しむ力を育成するとの考えが明らかになった。また、授業の中で心掛けていることとして、学習者一人ひとりに配慮することに関する考えが示された。

兄井(2000)は、効果的で良い体育授業の方策の一つとして、質の高い学習・運動が行われなければならないことを指摘している。この質の高い学習・運動とは、「学習者一人ひとりに対応し、学習者の力量に見合った学習のねらいが導かれ、今持っている自分の力にあった具体的なめあてを持ち、学習がされることによって達成される」こ

とである。これは、本研究における対象者らが目指す「できる」「よりできる」という授業目標と一致し、授業において成功裡な運動の学習が行われていると推察される。

授業目標を達成するために心掛けていることは、学習者一人ひとりに配慮した授業を実践することであった。学習者によって運動やスポーツへの興味・関心や技能レベルに違いがあり、これを踏まえて授業が行われ、各学習者ができるようになった瞬間を見逃さずに褒めることなど、様々な例が語られた。また、技能の習得と向上は大切にしながらも、対象者らは、学習者を「できる」「よりできる」ようにすることだけを目指しているわけではない。ある対象者は、運動技能の高まりにより達成感を感じさせ、さらに、それを「感謝」や「誇り」につなげていきたいと考えていた。

「運動やスポーツを楽しむ力」を育成したいという考えからも、ただ単に技能の習得や向上を目指すだけではないという考えが示された。そもそも、「運動やスポーツを楽しむ力」は、その運動やスポーツが「できる」だけでは身に付かない。対象者らは、運動やスポーツを実践する中で「運動やスポーツの楽しみ方」を学習し、運動やスポーツを見る立場からの楽しみ方や支える立場からの楽しみ方などが身に付いていくと考えていた。授業目標に関するこれらの考え方は、現行の学習指導要領に記載されている「運動を豊かに実践していくことができるようにする」ことや「生涯にわたって運動の親しむ資質や能力を育てる」(文部科学省, 2008)ことに準拠するものである。

「授業目標」の中では、体育や体育教師の存在価値に関する考えが示された。植屋ら(2008)は、中学校の体育授業が学習者に息抜きや面白おかしく過ごすだけのものであるという捉え方をされているという実態があるとし、「体育の重要性を訴えない教師の授業から体育は重要であると認識する生徒が生まれるであろうか」と指摘している。対象者からは、学習者の技能を高め、運動好きにさせる授業を実践していくことによって学習者の認識を高めたというとの考えが示された。この対象者の目指すところは、自分自身や自分が行う授業に対する認識のみを高めようとしているのではない。これらの対象者は、自分自身も含め、他の体育教師のためにも、体育及び体育教師の価値と意義を認識させていとする自覚と責任が備わっているためだと推察される。

このような捉え方は、別の対象者による授業の実践方法とその成果の適用に関するものにも当て

はまる。他の教師にも実践可能な方法で成果を上げることが信条とする対象者は、自らの専門的力量についての自信に加え、やはり、他の体育教師にも成果を普及させようとする自覚とが感じられる。

また、「体育の捉え方」のサブカテゴリーでは、生涯スポーツの立場から人々がどのように運動やスポーツを楽しんでいるか、その運動やスポーツ固有の競技特性は何かといった視点から、対象者が授業を構築していることが明らかとなった。「運動やスポーツを楽しむ力」は、将来のためだけに育成されるのではなく、その育成の過程においても楽しめるように授業を行わなければならないという考えである。そのために、運動やスポーツ固有の競技特性に気付かせる、触れさせる、場合によっては高い目標になることもあるがその競技特性を味わわせる工夫をしなければならないとしている。もちろん、ここでは楽しいだけの授業を考えているわけではない。分析の最後に紹介した対象者Gの発言が、ここで示した考察の大半以上を要約していると思われる。

付記：本稿は、平成23年度福岡教育大学学長裁量経費教育改革支援・研究推進支援プロジェクト「保健体育教師をめざす学生のためのキャリア・デザイン研究プロジェクト－現職教員の『職能成長』の吟味から－研究代表者 中西純司（前福岡教育大学 保健体育講座）」により助成を受けた研究の一部である。

引用文献

兄井 彰 (2001) 保健・体育の授業技術. 福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター(編) 授業技術ハンドブック－教育実習改善のために－ pp.157-162.

Bogdan, R. C. & Biklen, S. K. (1992) *Qualitative Research for Education: An Introduction to Theory and Methods* 2nd edition. Boston. MA: Allyn and Bacon.

Burns, R. B. (1994) *Introduction to Research Methods*, 2nd edition. London: Longman Cheshire Pty Ltd.

Bryne, D. (2002) *Interpreting Quantitative Data*. London: Sage.

Côté, J. et al. (1993) Organizing and interpreting unstructured qualitative data. *The Sport Psychologist*, 6, 55-65.

Côté, J., Salmela, J. H. & Russel, S. J. (1995) The

Knowledge of high performance gymnastic coaches: Methodological framework, *The Sport Psychologist*, 9, 65-75.

Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S. (eds.) (1998) *The Landscape of Qualitative Research: Theories and Issues*. Thousand Oaks: Sage.

嘉戸 脩 (1991) 保健体育教師に望まれる資質、能力. 保健体育教師養成研究会(編), 新盤保健体育教師への道, 大修館書店, 東京, pp.27-32.

木原成一郎・岩田昌太郎・松田泰定 (2005) 第2次世界大戦後の日本において保健体育教師に求められてきた専門力量. *学校教育実践学研究*, 11, 51-62.

北村勝朗・永山貴洋・齋藤茂 (2007) 優れた指導者の持つメンタルモデルの質的分析～音楽指導場面における教育情報の作用力に焦点をあてて～. *東北大学教育情報学研究*, No. 6, 7-16.

Lincoln, Y. & Guba, E. G. (1985) *Naturalistic Inquiry*. Beverly Hills, CA: Sage.

Miles, M. B. & Huberman, A. M. (1994) *Qualitative data analysis* . 2nd edition, Thousands Oaks, CA: Sage.

文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説保健体育編. 東山書房.

村瀬浩二・安部久貴 (2010) 中学校体育授業において教師に望まれる行動. *体育学研究*, 55, 379-393.

中井隆司 (1997) 体育教師論. 竹田清彦他(編) 体育科教育学の探求, 大修館書店, 東京, pp.381-396.

中井隆司・高橋健夫・岡沢祥訓 (1996) 体育教師のイメージに関する研究－特に, 大学生の中学・高校時代の体育教師に対する回顧的析を通して－. *スポーツ教育学研究*, 16:2, 125-135.

永山貴洋・北村勝朗・齋藤茂 (2007) 優れた少年野球指導者の身体知指導方略の定性的分析. *東北大学教育情報学研究*, No. 5, 91-99.

Patton, M. Q. (1990) *Qualitative evaluation and research methods*. 2nd edition. Newbury. Park, CA: Sage.

Robson, C. (2002) *Real World Research*. 2nd edition. Oxford: Blackwell Publishers Ltd.

齋藤茂・北村勝朗・永山貴洋 (2007) スポーツ選手の練習の「質」を分けるものは何か?～エキスパート・スポーツ選手の熟達化過程における練習の「質」の定性的分析～. *東北大学教育情報学研究*, No. 6, 45-54.

Silverman, D. (1993) *Interpreting Qualitative Data. Methods for Analysing Talk, Text and Interaction*. London: Sage.

武隈 晃 (1992) 教師に求められる資質. 宇戸正彦他(編), *体育科教育法講義*, 大修館書店, 東京, pp.189-193.

Tesch, R. (1990) *Qualitative research analysis types and software tools*. Bristol, PA: Falmer Press.

植屋清美・比留間浩介・渡辺保志 (2008) 中学校保健体育論—指導者たる教師に問われる資質や条件からの検討—. *教育実践学研究*, 13: 84-101.